

HEJLE 考

山 田 稔

On “Hejle”

Minoru Yamada

Hejle とはなにか？（序にかえて）

ペルシア語の「hejle」という語彙（起源はアラビア語 = hajala）は一般の辞書では1）飾った部屋 2）花婿と花嫁のための新婚の部屋，とある。単なる普通名詞でそれ以上の定義はないしイスラーム事典等にもまともな解説はない。それだけ微細な項目にすぎないのだろうが，光りのあてかた次第でイランの文化現象の一側面がよりはっきり見えてくるかもしれない。本稿ではこの語彙をキーワードとして神話，文学，宗教より見たイラン人の深層心理の一端に触れてみたい。

まず辞書の記述にもう一つ付け加えておきたいのは，「新婚の部屋を模したもの」（〈飾り神輿〉や特定の墓に飾られるガラスケース）である。「飾り神輿」とは，日本の祭礼に見られるように担いで移動できるものと，街角やマハッレ（街区）の人目につく場所に据えられるものがあり，その形態や装飾も多様である。普通，街頭に置かれるものは人の背丈から2 mの高さにおよび，6本の柱で覆いのある新婚の部屋が模され，それに鏡細工，羽根飾り，色電球，花（チューリップ，ばらなど），木の枝（柘榴，ばら，柘植），灯明などが飾られている。その上部に男性の顔写真と告知文が貼ってあるが，これはもちろん「花婿」の「晴れやかな」顔写真である。街行く人々はこの前に立ち「モバーラク，モバーラク」（おめでとう，おめでとう）とことばを交わすのだが，なぜ「新婚の部屋」を街頭に持ち出してまで初夜を祝うのだろうか。そこでまず「hejle」の社会性および文化的側面について考えてみよう。

1] hejle の社会性，およびその文化的背景

1) 「hejle」と戦時精神

イランの都市や地方の街頭風景としての「hejle」が特別な意味合いをもって現実の生活のなかに浮かびあがってきたのは疑いなくイラン革命およびイラン＝イラク戦争を契機にしていると思われる。「hejle」の数は革命と戦争による「殉教者」(shahid) の数に比例して増大しているから

である。戦死者は戦死者と呼ばれずイスラームの大義に殉じた英雄として公的顕彰の対象にされる。「hejle」が街頭にあらわれたのはこうしたイランの戦時精神昂揚の一環としてであった。「新婚の部屋」が「戦死者の部屋」になるのでは、おめでとうとは言いにくい。殉教者は、ヘンナで美しく化粧した童貞の青年でなければならず初夜の契りを結んではじめて天国に旅立つのだ。したがって「花婿」の写真は「殉教青年」の遺影であることがわかる。イスラーム的解釈によれば、とりわけ集団的義務としてのジハードによる殉教者は生前のすべての罪を許され天国の生を保証される。かくして晴れての殉教は祝福をもって迎えられるのだが、「hejle」には、オーソドックスなイスラーム的解釈に収まらない部分がある。それは「hejle」に祀られるのは未婚の男性であるという限定であり、既婚の殉教者は対象外であるということであって、そこに民俗的あるいは神話的な要素の存在を想定できるのではないかと思われるのである。宗教的、政治的権力のイデオロギーによる「戦時殉教精神」の昂揚には、同時に民衆次元のぬきがたいアーケイックな共同幻想や心性が作用しているのではないか。単なるシーア派神学の解釈だけではない、いわばひとつの文化現象としてのシーア（ペルシア語でシーエ）理解の問題でもある。

2) メタファーとしての「hejle」

以上から「hejle」は祝婚と葬送が同時にセットされている文化的な仕掛けであると理解できるだろう。また祀られる者が未婚の男性であることが改めて注目されてよい。韓国には「靈魂結婚式」(young hon gyul hon sik) というものがあって、不慮の事故で亡くなった若者のために新婚の式をあげてやるという。イランの「hejle」に類似した民間儀礼である。この類似性は、特定宗教の教理や信仰に結びつく以前の古代的、民俗的想像力に根をもつものではなかろうか。

「殉教して、一滴の血が大地に流される時、生前のもろもろの罪が一挙に帳消しにされ、やすらかに天国にゆける」これは、イラン人の殉教観の一面を言いあらわしたものであるが、イスラーム的表現のなかに、「大地に流される一滴の血」ということばがでてくる。また現代文学でも「男が独身を通すと地が呪う」とか「この邦の大地は無数の男たちの血で染めあげられている」といった文章によくぶつかる。もちろんこうした表現の多くはイランの古代神話や古典文学からとられているが、人間の生死が、大地との婚姻、大地の生産力とパラレルに考えられていることを示している。

次章以下では文化的装置としての「hejle」をてはじめに、伝承文化の中の若者について考えてみる。

3) 若者と通過儀礼

イランでは古代から15才が成人儀礼をうける年齢とされてきた。ゾロアスター教徒はこの年齢で聖なる腰紐と白衣を身につけたが、人間の魂（フラワシ）のまとう肉体の最も美しい年とされた。またアフラーマズダーの創造による原初の人間ガヨーマルス（死すべき存在）は背丈が高く、

光りに満ち、華やかで美しい15才の若者として創造された。ジャムシードの神話的王国では、老も死もなく、父も子も15才の輝きを保った。ゾロアスターの母は、夢に神の栄光（フアルナフ）を帯びた14夜の月の如き若者（ゾロアスター）を見る。14世紀のペルシア詩人ハーフィズは2年目のぶどう酒と14才の美少年を称えている。若者を輝く月に喩えるのはペルシア文学の常道だが、14夜の月が月の消滅と再生の循環的回帰のなかで最も輝ける状態であるように、肉体と魂の美の理想状態を満ちた月になぞらえるのである。しかし青年期はその成熟性と同時に人生における危機的なもの（死）を内に含んでいる。魂と肉体が徹底的に痛めつけられ、鍛えあげられるという厳粛で厳しい試練を経てはじめて若者は甦る。我が国の戦前の「若者組」にみられた儀礼や、「絞め殺し」と称して失神させるような風習（柳田国男）はその名残りでもある。青年期における豊穡と（死）は季節の循環と農耕（実りと刈り取り）と密接に関連しており、演劇的祭儀の母胎である。

4) 若者的義侠と世俗的「hejle」

再び「hejle」の話にもどる。「hejle」に祀られる対象は未婚の若者であると述べたが、すべての「hejle」に共通してみられるのは、自然死でないこと、即ち若者のイラン的殉教においては、うら若き「無垢の」青年の尋常ならざる「非業な死」が暗黙の前提とされているということである。イスラームでは神の道に殉じた者（shahīd）を真性シャヒードとする一方、夭折、疫病死、事故死などによるものは法的シャヒードとみなしており、殉教とはたんに聖戦による死に限られるものではなく、宗教的な殉教による「hejle」のほかに、いわば世俗的な「hejle」も存在するのである。一般の交通事故死であっても「hejle」を祀るし、とくに興味をひくのはイスラームとは関連がないと思われる義侠（任侠）の墓にも「hejle」が据えられる点である（ジャマールザーデ「俗語辞典」）。義侠は墮落すると暴力にものをいわせるヤクザや無頼（dāsh, lūti, jāhel）など社会的寄生虫になるが、本来「若者的義侠心」（ジャワーンマルディー = javān-mardi. Ar. futuwwa）の体現者であり、民衆の身近な英雄（pahlavān）モデルでもあった。今日ではほとんど失われているこの民俗レベルの「hejle」の方が戦時色に塗られたシリア「hejle」にくらべていっそう原型に近いのではなかろうか。前出の「俗語辞典」では、義侠の墓に置かれる「hejle」は丸い盆状の台に柱を立てた木製の小さなドーム型祭壇で、鏡細工や羽根飾りや色とりどりの玉で飾られていたとあるが、筆者は見たことがない。レザー＝シャー期になって義侠そのものの存在が過去の物語りとなり、当然その「hejle」の風習も廃れたのであろう。しかしレスリングのオリンピック＝メダリストであった Taxti は自殺後半世紀を経た今日でも都市の下町のチャーイハーネなどにその遺影が飾られ庶民的英雄の理想として語りつがれている。民衆の記憶のなかに生きる Taxti のような人物も「hejle」にふさわしい典型的なジャワーンマルド（若者）とみなせるだろう。独身を通すこと、騎士的精神の持ち主であること、義に殉じて簡単に命を投げだせることが義侠たる条件だとすれば、豊の上で死ぬことの方がむしろ稀なことであろう。無知の輩（jāhel）、ルー

ティー (lūti の語は旧約のロトに由来し、男色の意味もある) といった蔑称には「命知らず」の含蓄もある。義侠の突如の不自然な死が民衆に与える言い知れぬ畏怖が「hejle」を置く動機になっていると想定すれば、例えば一揆の首謀者が鎮魂のために神社に祀られることと基本的には同じものだろう。さて、イラン文化とりわけシーエ儀礼においては「不自然な死」が聖者や義者や英雄の「非運、非業の死」としてきわめて重要なファクターになっているので、次に聖者崇拜の中核ともいえるイマーム信仰の文化的背景を概観しておく。

5) イマーム信仰における殉教

シーア派ではイマームは最高の靈的指導者である。初代イマームのアリーに始まってその子ハサン、ホセインそれから12代のイマームまでに預言者の血をひくイマームとして絶対的正統性と無謬性が与えられている。シーア派はスンナ派におけるようなイジュマーの合意による指導者のアラブ的継承原理を認めず、預言者につながる血縁的継承原理を守り、「完全人間」としてのイマームのみに聖なる絶対性を賦与するのである。シーア派のイマーム信仰によればこれら歴代イマームの多くが暗殺や虐殺によって非業の最後をとげている。またシーア派はカルバラーの悲劇(第3代イマーム=ホセインの殉教。A.D.680)をもって成立したとも言われているが、悲運のイマームとその子孫と称するものを祀る、聖者崇拜のイマームザーデ信仰はこうした背景から派生している。イマームやイマームザーデの殉教にまつわる伝承にはイスラーム以前のイラン的王権意識の投影や、ゾロアスター教の終末論や土着の自然宗教などが混在しているが、ともあれ戦場における現代の若者の非業な死が、殉教イマームの伝承イメージに結びつくのはきわめて容易であることがみてとれるだろう。

2] 伝承にみえる若者

1) イランの古代伝承における殉教の英雄像

若者の非業な死をイランの文化的背景から切り離しイスラーム的殉教の枠のなかだけで論じるときややもすると一面的なジハード理解に終始することになりかねない。そこでまず、イスラーム以前のイランの神話や伝承にみられる負の英雄像にふれてみる(負というのは殉教者としての英雄の意味である)。イランの古代伝承やひいては古代オリエント神話の一部がイスラーム的文脈のカルバラー伝承に接続、継承されているのではないかというのが仮説的前提である。

中世パフラヴィー文献の中に「ザレールの追悼」(Ayâdgâr-i Zarêrân) というイラン東部起源の英雄文学がある。ゾロアスター教に改宗したイラン王に対して棄教をせまるトゥーラーンの軍と戦い殉教する英雄戦士の物語りでシャーナーメ「王書」と同様イラン対トゥーラーンの戦争が背景になっている。この中では「義と契約の履行」のために、受難と死が待ち受けているのを予言によって知りながら、あえて死地に赴く青年の運命が語れている。そしてこの受難と死こそが予言の成就であるとされるのである。ゾロアスター教的文脈での護教論的殉教物語りであるが、も

とは韻文形式でパルテアの吟遊詩人 (gôshân) によって詠われた葬送の歌謡であろうとされている。

次に「王書」におけるスィヤーヴァシュ (Siyâhvas̄h) をとりあげてみる。スィヤーヴァシュは上述のザレールよりずっと古い起源を有し、王書のなかでも異彩を放っている若者 (王子) で、この人物の物語りはカルバラー伝承に換骨奪胎される要素を多く含んでいるのみか、ストーリー性において旧約やクルアーンの「ヨセフの物語り」に極めて類似した構成を持っている (ヨセフのような生還はない)。またイラン的王権にまつわる部分やゾロアスター教的秘儀性をとりのぞけばアドニス神話 (アドニスのような復活の祝祭性はきわめて希薄) や、当然、年ごとに死に、再生する古代メソポタミアの若き神タンムズの神話を想起することができる。タンムズ神話の影響を否定できるものではないが、スィヤーヴァシュはおそらくトランスオキシアナの古代神であっただろう。スィヤーヴァシュが拭殺された時「宇宙的混乱」が生じ、大地に落ちたその血からは植物 (シダ科キリンケツ) が生えたという。義母の誘惑、父王の優柔不断、火渡りの試練、異郷 (トゥーラーン) への亡命、陰謀、殺害、その子カイー=ホスロウによる復讐という「王書」の物語りの筋立ての中に、「義」に殉じる天上的 (メーノグ) 人間像、王の「栄光」(フワルナフ) の正統性の問題、「未来体」(タニ=パセーン〈建て直され最終的に顕現する世界の形態〉) にみられる終末思想などを読み取ることができるが、これらをイスラームの文脈に翻案し位置づけてみれば、それがシーエ信仰におけるイマームとなりマフディー (救世主) になってもそれほど不自然ではない。シーエ的文脈では拭殺されているが、流された犠牲の血が大地で植物としての再生する部分はオリент各地に見られる大地母神信仰 (イランではアーナーヒーターあるいは地方的にはナナ) の名残りであるとの見当もつく。ビールーニーによればスィヤーヴァシュの追悼儀礼は9世紀ころまで実際にソグドやハーレズム地方にみられ「マギの哀悼歌」(gerîstan-i mughân) が詠われたという。また現代作家 S. ヘダーヤトの覚え書きや S. ダーネシュヴァルの小説『Savûshûn』ではクーキールーイエ州やファールス州での女たちの喪の集いで〈Susiyûsh〉(スィヤーヴァシュの死) という悲歌がうたわれるという記述がある。王書のスィヤーヴァシュが民間のフォークロアで千年以上も語り継がれ、うたわれてきたものどうか、経緯については明らかでない。筆者の聞き込みではその存在はとうとう確認できなかったが、シーエの宗教環境でしかもイラン革命後ではいっそう困難であろう。シーエ信仰では受難の英雄はイマームでなければならないからである。しかし女たちの間で歌いつがれる悲歌 (tasnîf) には茫洋たる太古の記憶の痕跡がきざまれていないともいいきれない。はからずもつい半世紀程前までスィヤーヴァシュの名で悲歌が歌われていたとすれば、宗教色、倫理性を強く帯びている聖なるイマーム=ホセインのイメージにくらべてスィヤーヴァシュのそれは豊かな物語性とあいまって美貌の神話的英雄のそれだからではないか。民衆的想像力はイマームさえスィヤーヴァシュやヨセフに変換したり擬する。逆にいえば、イマーム信仰は歴史の人間のイマーム (とりわけホセイーン) に古代伝承の神話性を賦与することで民衆の心性に強く作用する。それが次に述べるカルバラー伝承として結実してゆくのであるが、シーア派イスラームが国教とされたサファヴィー朝期にいたって成立したとみて

よいだろう。尚、同時期のモッラー＝ホセイン＝カーシェフィーによる『殉教者の園』(Rouzat-osh-shohadâ) はのちの講談 (rouze-xâni) や殉教劇 (ta'ziye) の基本テキストになっている。

2) カルバラー伝承とカーセムの「hejle」

歴史上のカルバラー事件は西暦680年(イスラーム暦61年1月10日)におきた。シーア派初代イマームであるアリーの次男ホセインがクーファの民の招きに応じて、70余名の兵士や婦女子とともにクーファに向かう途中、カルバラー(現在のイラク内)の荒野でウマイヤ軍の待ち伏せに会う。当初から敗北は明白であったが降伏を断固拒否、荒野の焼けつく炎暑のなかを10日間もちこたえたが、戦える男子はすべてウマイヤ軍に虐殺され最後に残ったホセインも無惨な最後をとげる。これがよく知られるカルバラー事件のあらましである。この事件をモデルにして事件の場面場面に応じたいくつかの語りや殉教劇がつくられていったが、演劇としてのタアズィエは19世紀後半(カージャール朝期)になって宮廷主催の舞台劇場出現をみ、カルバラー伝承の講談にはタキーエ(takiye)、ホセイニーイエ(hoseiniye)といった空間が用意された。これらの宗教儀礼はアッシュューラー(10日祭の「殉教のまねび」)をとともなったが、これは身に経帷子(死装束)をつけ、鎖で背や胸を打ちながら血をながして集団行進するものである(俗にパッション＝プレイとか哀悼のカーニバルといわれるもの。もっとも、短剣でわが頭を突くといった過激な行為は当局によって禁じられてきた)。

カルバラー伝承ではイマーム＝ホセインの殉教でクライマックスを迎えるが、しかしイマームには「hejle」に祀る未婚の若者のイメージはない。アッシュューラーの街頭行進でイマームの聖なる柩(naxl)に続いて神輿(hejle)がひとつ担ぎ出される。どちらも「魂の台座」(taxt-e ravân: <動く台座>の意味にもとれる)と呼ばれるが、前者が喪の柩であるのにたいして後者「hejle」はこれと対になるようにして担がれる祝婚の神輿である。これをカーセムの「hejle」という。カーセムの「hejle」には金色のドームをのせた、いかにもイマームザーデの建築を模したようなものからきわめて簡単な細工のものまである。農村部での「hejle」の例をとると、1×2 mの板のうゑに50cm幅で柘榴の枝を立て、黒い布を掛ける。黒い布のうゑに金銀色の飾りや鏡をつけ、小絨毯を敷き前面に2本のチューリップをおく、といったものがあるが、黒い布の上にカラルな布をおくのは喪と祝をあらわし、チューリップは殉教の象徴、柘榴は境界域を設定する聖なる果実であろう。さて、カーセムという若者は第2代イマーム＝ハサンの子でありイマーム＝ホセインの甥にあたる人物だが、この若者の「hejle」が冒頭に述べた現代の未婚青年(とくにイラン＝イラク戦争における犠牲者)の「hejle」のモデルになっていることが見て取れるだろう。カーセムの殉教物語りはテキストによって様々な粉飾を施されており、それが演じられるタアズィエではもっぱら演劇的効果をあげるために歴史的史実はほとんど虚構化される、それは「赤穂浪士」の比ではない。観客もなかばそれを承知で紅い血潮の透ける、月のようなかんばせの美少年の殉教物語りの舞台に酔いしれるのである。場所はカルバラーの荒野。敵の包囲のなか、全滅を悟っ

たイマーム（ホセイン）は兄（ハサン）の遺言を果たすべく甥のカーセムと自分の娘ファーテメの結婚を命じ、舞台に「hejle」が設けられる。新婚のカップルが登場し、祝福の音楽が奏でられる。そして観客には祝いのクッキーが配られる。そこに突然主のいない馬があらわれる（イマームの長男アクバルの死の暗示）。舞台が暗転し、アクバルの遺体が運びこまれると、観客全員総立ちになる。ステージの一方で葬送の間奏曲が流れ、観客は髪をかきむしる。祝福と哀悼の情緒的急転のなか、花婿衣裳のカーセムも初夜も終わらない内にイマームから経帷子を着せられ名誉ある晴れのジハードに向けてついには婦らぬ人になるというのがおおまかな筋である。我々の目からすると、このようなストーリーには無理がありこじつけがましく不自然な感を否めないだろう。しかし近代（演劇）の目で見るとわれわれの抱くこの不協和音のような違和感自体が私の関心をひく。おそらくこの違和感は、花婿衣裳に経帷子を着せまでして祝婚と葬送をワンセットにしようとするアーケイックな心性との想像力の乖離から生じているものかもしれない。

3] ヴィクティムとしての若者

1) 生と死（再生）__その相互反転

死装束と晴れ着の一見相反するものの併存は世界的にその多くの民俗的事例を見出すことができる。ウズベキスタンやタジキスタンでは、花嫁衣裳（ムルサク、パランジャ）を喪服や柩にかける覆いとして用いる習俗があったという。イサベラ＝バードの記録（日本奥地紀行）によれば、東北の素封家の葬儀で、死者の未亡人が新婚当時の花嫁のように白粉をつけ、口紅を塗り、丁寧に髪を結び、べっ甲のかんざしをつけていたという（明治11）。第二次大戦の初頭、東京で行われた戦没者追悼式で、東北から上京した未亡人らは派手な花嫁衣裳のいでたちで周囲を驚かせたという。また衣裳にかかわるものではないが、イランのロレスターン州では、死者の家に飾った雌馬をつれて行き、尻尾とたてがみを切り落とした死者の雄馬（葬送に伴う犠牲の馬）の脇に繋げる風習があった。これらの事例では生死は表裏一体である。反対物の一致と言われたりもするが反対物として生死を両極の概念で切り離して生というコインの表だけをみるのも、死の側面のみを強調するのも近代意識にどっぷりつかった精神の惰性であろう。上述のシーエ儀礼では、殉教の悲劇性がことさら増幅され、とくに革命や戦争状況では死が日常的に喚起されるが、「hejle」には死を祝祭たらしめるエロスの要素がみてとれるのである。シーエ儀礼ではおおらかなエロスは忌避され再生の賛歌はきわめて希薄であるが、「hejle」には、カーセムの結婚（史実ではない）というフィクションがもちこまれている。人間の生死の相を大地の循環の中に見て豊穡と死を同時的にとらえるとき劇的な凝縮時空が現出する。カーセムのタアズィエにおいて必要とされたのはそうした演劇的仕掛けであった。夏の豪華の真っ盛りに死ぬ、と書き虚構の美に殉じた三島由紀夫が選んだのは世間に衝撃的な、あるいはきわめて不快な違和感を与える不自然な自決ではあったが、これを欠いては氏の美学が完結するものではありえなかった。仮に人間にタナトスへの無意識の衝動を措定すればエロスに彩られた悲劇や神話の呪縛からわれわれはそう簡

単に抜けだせるものではないだろう。「…わたしの仏前および墓前では〈ダリヤ〉や〈チューリップ〉などの華やかな洋花を供えてください。…わたしの死んだ日より、むしろわたしの誕生日である4月9日を仏前で祝って欲しいと思います…」(きけわだつみのこえ)。これは無実ながら戦犯として処刑された学徒兵、木村久夫の残した遺書である。ここには近代浪漫主義への陶醉や暴力的に生に穴をあけ死に突入しようとする虚構性がみられるとはとうてい思えない。「散華」といった美句からも程遠い。死を強いられて発せられたこのことばに再生へのぎりぎりの人間的な希求が華やかな花を添えて表明されているのである。

2) いらにあん＝レクイエム (おわりに)

神話における英雄の犠牲は残酷である。「hejle」が若者の不自然な、非業の死を鎮魂するものとしてイスラームによる解釈をはみだすものだとはじめに述べておいたが、神話では若者の殺され方が尋常ではない。いや殺され方が尋常であってはならないようだ。これはフレイザーを持ち出すまでもなくどんな神話にも共通して言えることだろう。アドニス(イシス)は猪の牙にかけられ、ずたずたに引き裂かれる。ローマ時代のサートゥルナリア(種蒔き祭)では神に選ばれた若者がわたとわが喉を切り裂く。カーセムは、肉体はひきちぎられ、骨はばらばらにされる。アステカ族のトシカトル祭では、一点の瑕もない美しい肉体の若者が王のように遇され死の20日前には4人の乙女を花嫁として与えられ、宴と踊りの祝祭ののち、湖中の祭殿で胸を切り裂かれ、切りとられた心臓は太陽の供物とされる。そして「神」の遺骸は首を切られ槍で串刺しにされる。イランのスイヤーヴァシュは、傷つけられ、両手を縛られ屈辱をうけたのち「小羊」のように喉を掻き切られるが、「金の盃」に受けるべき「一滴の血」が大地に落ちそこから植物が生じる。残酷な殺され方はかつて穀物神として大地母神にささげられた若き犠牲の「神殺し」に不可欠の要素であっただろう。「hejle」の語彙をさぐってゆくうちに、現代イランの青年の「殉教」をめぐる民衆的心性が、カルバラー伝承とそのまた古代的文脈でオリエント神話やイランの古代伝承がつらなっているのを知る。もちろん「hejle」の起源を直接タンムズ神話に遡って系譜的に証明しようとするのには無理がある、またそのような古代性さえ意外に新しい借用でありうるが、カルバラー伝承は、カルバラーの悲劇を世界史のなかの一歴史的事件であると位置付ける時間認識とは全く異質な時間意識と救済論を展開している。それがシーエ信仰の中核となつて、イスラーム的表現によるイラン的低抗、殉教意識を増幅し、時をこえて再生産してゆく装置として機能しており、また「殉教のまねび」はイラン文化の独自性とアイデンティティーを主張しつつ、アーケイックな心性をはらんで、生と死の相互反転を肉体で演じる特異な儀礼になっているのである。

美しい若者は、完全無垢の肉体と魂の絶頂に、小羊のように残酷に殺されなければならない。一滴の血が大地と結ばれて、神として再生するためである。「キリストは十字架という結婚の新床にのほり、(その痛ましい死の日に)女性(マリア)と結ばれた」(アウグスティヌス)になれば、「hejle」はイラン的形態の十字架とも言えよう。

* * * * *

1978年、イランでの言語調査旅行のおり、われわれの良きインフォーマントになってくれた有能な若者、ユーソフ＝コレイシー。かれは18才の若さでイラン＝イラク戦争で殉教した。純粹培養でつちかわれたような宗教青年であった。イラン各地の墓地にはそうした青年たちの「hejle」が無数にある。政府が提供した墓のうえに木枠のガラスケースが据えられ、なかに若者の遺影や鏡や花や灯明が飾ってあるのだが、それらの脇にそっと目立たぬように小さなつがいの小鳥（人形）が置かれているだろう。光明に満ちた彼岸にむかって旅立った若者の伴侶として手向けられた花嫁である。

裏をみせ表をみせて散る紅葉（良寛）